

作業療法学学生のキャリア成熟度と カリキュラムとの関係性に関する研究

館岡周平 會田玉美

(Shuhei TATEOKA Tamami AIDA)

【要約】

《目的》 本学作業療法学科のカリキュラムがキャリア成熟に役立っているかを調査し、本学のキャリア教育を検討することである。

《方法》 本学作業療法学科に在籍する2～4年次生、全181名に対し、大学生のキャリア成熟度を測定する人生・職業キャリア・レディネス尺度（以下、LCR, OCR）（坂柳, 1996）と、筆者が作成した5段階の評定尺度によるカリキュラムのキャリア成熟役立ち度アンケート（以下、CR役立ち度）を実施した。

《結果》 回答率は71.2%で、2年次生、3年次生と比べ4年次生のOCR自律性と計画性が有意に高かったが、その他の領域での変化は乏しかった。CR役立ち度は、多くの科目で中央値4.0以上と高かったが、LCR, OCR全ての領域と相関関係のある科目は無かった。

《結論》 4年次生のOCR自律性と計画性が高い得点傾向を示した要因は、就職を現実的に捉え、自分なりの職業人としての目標について真剣に考え始めている段階であるためと考えられる。一方で、CR役立ち度とLCR, OCRの全ての領域との相関関係が有意な科目は無く、現行のカリキュラムの科目は、学生のキャリア成熟に役立ってはいるが、学生からは必要科目と捉えられていない可能性があると考えられた。

キーワード：作業療法学学生 キャリア カリキュラム

I. 序 論

我が国では、平成11年12月中央教育審議会答申¹⁾「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」においてキャリア教育の必要性が提唱された。中央教育審議会²⁾によるとキャリアとは、人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見出していく連なりや積み重ねであり、キャリア教育とは、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義されている。キャリアの形成にとって重要なのは、自らの力で生き方を選択していくことができるよう必要な態度を身に付けることにあるとされている³⁾。特に大学教育

におけるキャリア教育の実践は重要な課題であるとされており²⁾、実践の方向性としては「基礎的・汎用的能力を確実に育成するとともに、社会や職業との関連を重視し、実践的・体験的な活動を重視する」とされている²⁾。そして、キャリアの選択・決定やその後の適応への個人のレディネスないし取り組み姿勢である「キャリア成熟」を促すことが、キャリア教育の目標として位置づけられている⁴⁾。

我々作業療法士は、就職し作業療法士の国家資格を取得後、教えてもらう立場から対象者を教える立場へと役割を変化させることが求められる。その準備期間である養成校在学中に、様々な知識や技術を学ぶだけでなく、自身のキャリアについて考える必要があるが、養成校におけるキャリア教育は充分議論されてい

ないと考えられる。

医療系大学生のキャリア教育に関する先行研究では、工藤ら⁵⁾が一年次生に育むべきキャリア発達に関わる能力領域を調査し、「かかわる力」「もとめる力」「えがく力」の育成が重要と述べている。また、看護大学生を対象とした研究では⁶⁾、性別を超えて柔軟に快適な看護が提供できるプロフェッショナルな能力を育むキャリア教育の必要性を述べている。

そして、朝倉ら⁷⁾の理学療法士、作業療法士養成校の在学学生に対するキャリア教育の現状とニーズに関する研究では、学生の半数以上がキャリアについて一定程度の意識があり、専攻課程通りの職業を希望し、勤務希望施設も明確であったと述べられており、授業であまり触れられない勤務実態に関する情報提供の希望が多かったと報告されている。また、養成校在学中から就労後の勤務実態についての情報提供によりキャリアプランが立てられやすいと考えられており、学生に対して卒業生から情報提供を行う試みも行われている⁸⁾。このように、看護・医療系学生に対するキャリア教育に関する研究は散見されるが、作業療法学生のキャリア成熟度とカリキュラムとの関係性や、カリキュラムがキャリア成熟に役立っているかについて、学生が主観的にどのように捉えているかは明らかにされていない。

厚生労働省による「新規大卒就業者の産業別離職状況」⁹⁾の報告では、平成26年3月大学卒業者の医療、福祉職への就職者数は61,628人に対し、3年目までの離職者数は23,143人であり、作業療法士が含まれる医療・福祉職は離職者が非常に多い職種となっている。このような状況から、就職後の、専門的な業務内容だけでなく、余暇や自己研鑽など仕事以外の時間の過ごし方、将来の人生設計についてなどを養成校在学中から、「自分はどのように職業人生を送ることができていれば良いか」を、より明確にイメージ出来ないと、就職後の働く意欲の低下や離職の可能性も高まると考えられる。さらに、今後、人口構造の変化により作業療法の対象者数が益々増加し、ニーズの多様化が予測される。またArtificial Intelligence (AI)、Internet of Things (IoT)などのテクノロジーの進歩により、ロボットの活用やインターネット、ウェアラブル端末を活用した遠隔による支援など働き方も多様化していくことが予想される。自らの目標を持って成長できる作業療法士を輩出するためにも、現行のカリキュラムと

キャリア成熟度の関係性を把握し、養成校でのキャリア教育を検討する必要性は高いと考えられる。

本研究の目的は、作業療法学生のキャリア成熟について検討し、作業療法学科のカリキュラムがキャリア成熟に役立っているかを把握するためのアンケート調査を行い、今後の養成校でのキャリア教育について検討することである。

Ⅱ. 研究方法

1. 研究対象者

調査対象は、調査期間中に保健医療学部作業療学科に在籍する2年次生から4年次生の全学生181名を対象とした。協力依頼時に、自由意志であり不参加による不利益がないことを伝えた。通年のカリキュラムを通してカリキュラムの役立ち度やキャリア成熟度をみるために、作業療法教育の学びをスタートさせて間もない1年次生は除外した。対象である2年次生は入学後1年を経て教養科目や作業療法の基盤となる科目を学修したところ、3年次生は作業療法の専門的な内容が展開される科目を学び1ヶ月間の実習を終えたところ、4年次生は4ヶ月間の実習を終えて国家試験や就職を前にした学年である。

2. 調査方法

(1) 調査内容

対象者のキャリア成熟度は①「人生キャリア・レディネス尺度 (以下LCR)」¹⁰⁾と②「職業キャリア・レディネス尺度 (以下OCR)」¹⁰⁾を用いて測定した (表1)。キャリア・レディネスの構成にあたっては、キャリア概念の多義性や広がりなどから2系列設定されており、①は主に、人生や生き方、取り組み姿勢を、②は主に職業選択と職業生活への取り組み姿勢を測る尺度である。どちらも各27の質問項目があり、関心性、自律性、計画性の3領域と9つの要素からなっている。各項目について「よくあてはまる」を5点、「ややあてはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「全くあてはまらない」を1点とする5件法により回答を求める尺度である。尚、各領域の合計得点が高いほど、当該領域のキャリア・レディネスすなわちキャリア成熟度が高いことを意味している。尚、本尺度はおおむね信頼性と妥当性を備えていることが確認されている¹⁰⁾。

表1 人生キャリア・レディネスと職業キャリア・レディネス尺度項目

人生キャリア・レディネス尺度 (LCR)		職業キャリア・レディネス尺度 (OCR)	
関 心 性	1. これからの人生や生き方について、とても関心をもっている。	1. 将来の職業や就職について、とても関心を持っている。	関 心 性
	2. 人生設計や生き方についての記事には、よく目を通すようにしている。	2. 職業や就職に関する記事には、よく目を通すようにしている。	
	3. 人生設計や生き方にあまりあまり関心がない。	3. 将来の職業生活をどう過ごすかは、あまり関心がない。	
	4. 希望する人生を送るにはどうすればよいか、調べたことがある。	4. 希望する職業に就くにはどうすればよいか、調べたことがある。	
	5. どのような人生・生き方があるか、本や新聞などで呼んだ事がある。	5. 将来の職業や就職先について、いろいろ比較し検討している。	
	6. 今後の人生を充実させるために参考となる話に、耳を傾けるようにしている。	6. 将来、充実した職業生活を送るために参考となる話は、注意して聞いている。	
	7. どのような生き方が自分に向いているのか、真剣に考えたことがある。	7. どのような職業が自分に向いているのか、真剣に考えたことがある。	
	8. 自分は何のために生きていくのか、真剣に考えたことがない。	8. 自分は何のために働くのか、真剣に考えたことがない。	
	9. 将来の生き方は自分にとって重要な問題なので、真剣に考えている。	9. 職業選択や就職は自分にとって重要な問題なので、真剣に考えている。	
自 律 性	10. これからの人生は、自分の力で切り開いていくことができる。	10. 職業人になったら、自分から進んで積極的に仕事を行おうと思う。	自 律 性
	11. 人生をどう過ごすかは、他の人が考え始めるころに、自分も考えればよい。	11. 就職の準備は、他の人から言われなくても自主的に進めることができる。	
	12. これからの人生をどう過ごすかは、周囲の雰囲気にあわせて決めようと思う。	12. 職業の選択・決定では周囲の雰囲気に流されることはない。	
	13. どんな生き方をしていけばよいかは、最終的には自分自身の責任で決める。	13. 充実した職業生活を送れないのは、自分自身の責任が大きいのと思う。	
	14. これからの人生は、自分で責任を自覚して送ろうと思う。	14. 職業人になってからは、責任を自覚して仕事に取り組もうと思う。	
	15. まだしばらくの間は、責任のある生活はしたくない。	15. 職業人になっても、責任の重い仕事はやりたくない。	
	16. 希望する人生を送れるように、日ごろから自分を向上させるよう心掛けている。	16. 職場で難しい問題にぶつかっても、自分なりに克服していこうと思う。	
	17. 今後の人生で困難なことに突き当たっても、自分なりに克服していこうと思う。	17. 職業生活を充実させるためには、面倒なことでも積極的にチャレンジする。	
	18. 人生を充実させるためには、面倒なことでも積極的にチャレンジする。	18. 職業生活を通して、さらに自分自身を向上させたい。	
計 画 性	19. 希望する生き方を送るための具体的な計画を立てている。	19. 希望する職業に就くための具体的な計画を立てている。	計 画 性
	20. 自分は将来どのような人生を送っているか、わからない。	20. 自分は将来どのような職業についているか、わからない。	
	21. 自分の今後の人生は、だいたい想像できる。	21. 自分の将来の職業生活の様子は、だいたい想像できる。	
	22. どのような生き方をしたいか、まだわからない。	22. どのような職業に就きたいか、まだわからない。	
	23. これから先どのような人間になりたいのか、自分なりの目標をもっている。	23. どのような職業人になりたいのか、自分なりの目標をもっている。	
	24. 今希望している生き方は、またすぐ変わるかもしれない。	24. 今希望している職業は、またすぐ変わるかもしれない。	
	25. 充実した人生を送るための計画に沿って、すでに取り組んでいることがある。	25. 職業選択や就職は、自分の個性と就職機会の両面から十分考えている。	
	26. これからの人生設計は、自分の個性と社会状況の両面から十分考えている。	26. すでに計画に従って、就職試験のための勉強をしている。	
	27. 今希望している人生や生き方は、自分なりに実現できそうだと思う。	27. 就きたい職業は決めたが、それに向けての積極的な努力は特にしていない。	

カリキュラムのキャリア成熟に対する役立ち度については、学年ごとの作業療学科のカリキュラムを参考に科目を必修科目と専門選択科目を抽出し独自に③「カリキュラムのキャリア成熟役立ち度アンケート(以下、CR役立ち度)」を作成し、実施した。科目ごとに「あなたが作業療法士としての働き続ける姿を想像するために、それぞれの授業はどのくらい役立ちましたか?(どのような分野で働くか?作業療法士としてどんな経験を積みながら働き続けようとするか?など)」と問い、キャリア成熟におけるそれぞれの授業の役立ち度について「とても役立った」を5点、「少し役立った」を4点、「どちらともいえない」を3点、「あまり役立たなかった」を2点、「全く役立たなかった」を1点とする5件法を用いて回答を求めた。また、「自

分が作業療法士となり働くために、どのようなことを学びたいですか?」と自由記載式に回答を求めた。

(2) 調査方法

アンケート用紙は、対象者全員に配布するときに①、②、③を1セットとしてホチキス留めをした。アンケート用紙の配布は、一つの学年ごとに全員が揃う授業の終わりに実施し、学生に対する調査目的などの説明、内容の読み上げは、実施責任者である筆頭筆者または研究を実施した養成校の専任教員の協力を得て行った。

3. 調査期間

調査は2018年5月～6月に実施した。

4. 分析方法

統計ソフトはIBM SPSS Statistics 23を使用した。LCRとOCRについては、欠損値のない全ての回答について関心性、自律性、計画性の3領域ごとの合計点を求めた後、2年次生～4年次生の間で、キャリア成熟に差異があるかどうかを検討するために、各3領域の得点の一元配置分散分析を行った。また、一元配置分散分析の結果で差を認めた領域については、Bonferroniの多重比較の検定を行った。いずれも危険率5%未満を有意とした。CR役立ち度については、科目ごとに中央値と四分位範囲を求めた後、LCR、OCRとCR役立ち度の相関関係をSpearmanの順位相関係数を使用して検討した。

「自分が作業療法士となり働くために、どのようなことを学びたいですか？」を自由記載式に回答を求めたデータは、学生がキャリア成熟のために学びたいことのカテゴリー分けを行った。分析は質的内容分析に則り11)、回答を繰り返し読み、回答の中の注目すべき語句を抽出し、内容の類似性によって分類し、サブカテゴリー名を付けた。サブカテゴリーとデータが一致しているか、分類の基準が妥当かどうか継続的に検討後、サブカテゴリーを類似性により分類し、カテゴリー名を付けた。分類は筆頭著者が行い、後に共同研究者と分析の妥当性を確認した。

5. 倫理的配慮

本研究は目白大学『人及び動物を対象とする研究に関わる倫理審査委員会』（承認番号18-004）の審査を受け実施した。配布の際に、研究者より研究趣旨と研究方法、研究への協力は自由意志であること、同意が

得られなかった場合や同意された後の辞退にも一切の不利益が起こらないことなど倫理的配慮について説明し、配布後1週間を目途に所定の回収BOXに提出してもらった。尚、本研究はアンケートの回答と提出により同意が得られたと判断した。

Ⅲ. 結 果

1. 対象者の属性

有効回答率は71.2%で（2年次生42名：71.1%，3年次生43名：64.1%，4年次生45名：83.3%）であった。性別の内訳は、男性27名（2年次生9名，3年次生6名，4年次生12名），女性103名（2年次生33名，3年次生37名，4年次生33名）であった。

2. 全学年のキャリア・レディネス尺度の領域ごとの平均値と学年間のキャリア成熟の差

全学年のLCR、OCRにおける関心性、自律性、計画性の3領域ごとの平均値と領域間で点数の有意差を明らかにするために一元配置分散分析、多重比較を行った（表2）。学年ごとのLCR、OCRの3領域の一元配置分散分析の結果から、OCRの自律性と計画性に5%水準で有意な差が認められた。そして、その後の多重比較の結果、2年次生と4年次生、3年次生と4年次生の間は0.5%水準で有意な差が認められた。すなわち、2年次生と3年次生よりも4年次生の方がこれらの得点は有意に高かった。また、OCRの関心性の領域とLCRにおいては学年が上がることに伴う得点の変化が少なかった。

表2 LCR、OCRの領域ごとのキャリア成熟の変化

	M ± SD			F	df	多重比較		
	2年	3年	4年			2-3年	3-4年	4-2年
LCR関心性得点	32.97 ± 5.44	33.22 ± 4.26	32.26 ± 4.79	0.98	2			
LCR自律性得点	33.15 ± 3.87	32.73 ± 2.25	31.91 ± 4.07	1.42	2			
LCR計画性得点	28.27 ± 5.57	27.38 ± 6.77	26.35 ± 5.67	1.14	2			
OCR関心性得点	30.91 ± 5.78	32.11 ± 5.39	33.06 ± 4.90	1.20	2			
OCR自律性得点	29.88 ± 3.49	29.54 ± 2.82	32.82 ± 4.12	9.23	2		*	*
OCR計画性得点	27.06 ± 5.91	25.38 ± 4.77	29.44 ± 4.42	5.32	2		*	*

(注) * p < .05

3. カリキュラムのキャリア成熟に対する役立ち度 (中央値, 25%tile 値-75%tile 値)

CR役立ち度の結果(表3)より, 解剖学(5, 5-5), 運動学(5, 5-5), 生理学(5, 4-5)などが含まれる基礎医学科目, 整形外科(5, 4-5), 神経内科学(5, 4-5), 小児科学(4, 3-5), 精神医学(4, 3-5)などが含まれる臨床医学, 身体障害評価学(5, 5-5)や身体障害治療学(5, 5-5), 精神障害評価学(5, 5-5), 精神障害治療学(5, 4.5-5), 臨床実習(5, 5-5)が含まれる作業療法専門分野など多くの項目で役立ち度の中央値は4「少し役立った」以上であった。

4. LCR, OCRの各領域と各科目のCR役立ち度との相関

LCR, OCRの関心性, 自律性, 計画性の3領域と現行のカリキュラムの必修, 選択の各科目のCR役立ち度との相関をそれぞれ示した(表4)(表5)。

複数の科目でLCR, OCRと有意な相関関係がみられたが, 強い相関関係を示す科目はみられなかった。以下()内は履修者数を示す。

必修科目に関しては, LCRに比べ, OCRとの相関関係がみられた科目は少なく, その中で, 病理学(88), 神経内科学(88), リハビリテーション医学(45), 基礎ゼミ(130), コミュニケーション演習(130)はLCRの複数の領域で相関関係がみられた。それに対し, OCR自律性やOCR計画性に関しては相関関係を示す科目がみられなかった。

選択科目では多くの科目でLCR, OCRとの相関関係がみられ, その中でも医療と福祉(85), 高齢者・障害者福祉論(91), 衛生・公衆衛生学(5), 職場倫理・職場管理学(4), 関係法規(5), 介護福祉論(82), 作業療法演習Ⅲ(36), 作業療法特講(20), リスク管理学(24), 基礎作業学演習Ⅰ(118), 基礎作業学演習Ⅱ(68)はLCRの複数領域と相関関係がみられた。また, 微生物学(25), 救急医学(36), 衛生・公衆衛生学(5), 職場倫理, 職場管理学(4), 介護福祉論(82), 地域作業療法学演習(40), 作業療法特講(20), リスク管理学(24), 作業分析学(13)はOCRの複数の領域と相関関係がみられた。これらについては, 選択科目であるため履修人数が少ない科目も含まれていた。

5. 学生がキャリア成熟のために学びたいことについての質的内容分析

58名が記述回答をし, その他は無回答であった。得られた記述回答を, 質的内容分析に沿って分析を実施した。類似性によりカテゴリー分けを行った結果, 4つのカテゴリーが生成された(表6)。以下に, 〈〉はサブカテゴリー, []はカテゴリー名で示す。[リアルな臨床]は〈臨床現場〉, 〈臨床で活用できる知識と技術〉, 〈臨床で出会う症例〉の3つのサブカテゴリーで構成された。[作業療法の支援技術]は〈作業療法の手技〉, 〈機器を用いた作業療法支援〉, 〈時期別作業療法〉, 〈作業療法支援のプランニング〉の4つのサブカテゴリーで構成された。[コミュニケーション技法]は〈コミュニケーションの基本〉, 〈疾患別コミュニケーション〉の2つのサブカテゴリーで構成された。[就職関連]は〈就職先〉, 〈国の方針〉, 〈就職後のキャリア〉の3つのサブカテゴリーで構成された。

IV. 考 察

本研究では, 作業療法学生のキャリア成熟について調査し, 今後の養成校でのキャリア教育を検討することを目的として, 作業療法学科のカリキュラムが学生のキャリア成熟に役立っているかの主観的な評価とキャリア成熟との関連性についてアンケート調査を行った。対象者は作業療法学科2年次生から4年次生であり, 女子学生が全体の80%以上を占めており, 女子学生の意見を反映したものと考えられる。

1. 学年ごとのキャリア成熟度の変化

学年ごとのキャリア成熟度では, LCRの得点に有意な差は認められなかったが, OCRの自律性と計画性の得点において2年次生と4年次生, 3年次生と4年次生にそれぞれ有意な差が認められた。4年次生は必修のカリキュラムを概ね履修した段階であり, 卒業や国家試験が迫ってきているため, 自身の就職を現実的に捉える段階であると考えられる。このことから「就職の準備は, 他の人から言われなくても自主的に進めることができる」や「職業人になってからは, 自分自身の責任が大きいと思う」などOCR自律性に関して2年次生と3年次生に比べて高い得点傾向を示したと考えられる。また, 4年次生は4ヶ月以上の臨床実習を終え, 臨床での作業療法士の職務のイメージがより具

表3 現行のカリキュラムのキャリア成熟に対する役立ち度

必修科目	中央値（四分位範囲）	N	選択科目	中央値（四分位範囲）	N
人間発達学	4.0（3.0～4.0）	130	医療と福祉	4.0（3.0～5.0）	85
解剖学	5.0（5.0～5.0）	130	高齢者・障害者の心理	4.0（3.0～5.0）	66
解剖学実習	5.0（5.0～5.0）	130	高齢者・障害者福祉論	4.0（3.0～5.0）	91
生理学	5.0（4.0～5.0）	130	薬理学	3.0（1.0～4.0）	25
生理学実習	4.0（4.0～5.0）	130	微生物学	5.0（3.0～5.0）	6
運動学1	5.0（5.0～5.0）	130	栄養学	3.0（3.0～4.0）	24
運動学2	5.0（5.0～5.0）	88	スポーツ障害学	4.0（3.0～4.0）	28
運動学実習	5.0（5.0～5.0）	88	救急医学	3.0（3.0～4.0）	36
リハビリテーション概論	4.0（3.0～4.0）	130	衛生・公衆衛生学	4.0（3.0～4.0）	5
病理学	4.0（4.0～5.0）	88	職場倫理・職場管理学	4.0（3.0～5.0）	4
整形外科学	5.0（4.0～5.0）	88	安全管理論	5.0（4.0～5.0）	6
臨床医学総論	3.0（3.0～4.0）	88	関係法規	4.0（3.0～5.0）	5
内科学	4.0（3.0～4.0）	88	言語聴覚障害治療学	4.0（3.0～5.0）	52
神経内科学	5.0（4.0～5.0）	88	介護福祉論	4.0（3.0～4.0）	82
小児科学	4.0（3.0～5.0）	88	作業療法演習Ⅰ	4.0（3.0～5.0）	115
精神医学	4.0（3.0～5.0）	88	作業療法演習Ⅱ	4.0（4.0～5.0）	71
リハビリテーション医学	5.0（4.0～5.0）	45	作業療法演習Ⅲ	4.0（3.0～5.0）	36
老年医学	4.0（3.0～5.0）	88	高次神経障害作業療法学	5.0（4.0～5.0）	43
臨床心理学	4.0（3.0～4.0）	88	地域作業療法学演習	5.0（4.0～5.0）	40
作業療法学概論	4.0（3.0～4.0）	130	福祉機器論	5.0（4.0～5.0）	40
基礎作業学	4.0（3.0～5.0）	130	義肢装具学	4.0（3.0～5.0）	38
日常生活適応学	5.0（4.0～5.0）	88	義肢装具学演習	4.0（3.0～5.0）	3
日常生活適応学演習	5.0（4.0～5.0）	45	作業療法特講	4.0（4.0～5.0）	20
身体障害評価学	5.0（5.0～5.0）	88	職業関連活動	4.0（3.0～5.0）	18
身体障害評価学演習	5.0（5.0～5.0）	88	リスク管理学	4.0（4.0～5.0）	24
身体障害治療学	5.0（5.0～5.0）	45	障害者スポーツ論	4.0（3.0～4.0）	14
身体障害治療学演習	5.0（5.0～5.0）	45	作業分析学	4.0（3.0～5.0）	13
精神障害評価学	5.0（4.0～5.0）	88	チーム医療演習	5.0（4.0～5.0）	43
精神障害評価学演習	5.0（4.0～5.0）	88	基礎作業学演習Ⅰ	4.0（4.0～5.0）	118
精神障害治療学	5.0（4.5～5.0）	45	基礎作業学演習Ⅱ	4.0（3.0～5.0）	68
精神障害治療学演習	5.0（4.0～5.0）	45	基礎作業学演習Ⅲ	4.0（3.0～5.0）	40
発達障害評価治療学	4.0（3.0～5.0）	88	理学療法概論	4.0（3.0～4.0）	54
発達障害評価治療学演習	4.0（3.0～5.0）	88	看護学	4.0（3.0～4.0）	14
老年期障害評価治療学	4.0（4.0～5.0）	45			
老年期障害評価治療学演習	4.0（4.0～5.0）	45			
地域作業療法学	4.0（4.0～5.0）	45			
臨床実習特論Ⅰ	5.0（4.0～5.0）	130			
臨床実習特論Ⅱ	5.0（4.0～5.0）	88			
臨床実習特論Ⅲ	5.0（4.0～5.0）	45			
レベル1 臨床実習	5.0（4.0～5.0）	130			
レベル2 臨床実習	5.0（5.0～5.0）	88			
レベル3 臨床実習	5.0（5.0～5.0）	45			
心理学	4.0（3.0～4.0）	130			
統計学	3.0（2.0～3.0）	88			
基礎ゼミ	4.0（3.0～4.0）	130			
表現演習	3.0（2.0～4.0）	130			
コミュニケーション演習	4.0（3.0～4.0）	130			
情報活用演習	3.0（2.0～4.0）	130			
スポーツ・健康	4.0（3.0～4.0）	130			
英語	3.0（2.0～4.0）	130			

表4 LCR,OCRの各領域と各科目のCR役立ち度との相関（必修科目）

必修科目	LCR関心性	LCR自律性	LCR計画性	OCR関心性	OCR自律性	OCR計画性
人間発達学	.259	.262	.168	.187	.147	.104
解剖学	.155	.254	.079	.128	.098	.028
解剖学実習	.039	.103	-.033	.039	-.038	-.105
生理学	.17	.166	.117	.183	.172	.194
生理学実習	.147	.18	.271	.08	.089	.076
運動学 1	.299	.287	.161	.177	.134	.126
運動学 2	.113	.017	.179	.072	-.163	.066
運動学実習	.107	.074	-.006	-.011	-.002	-.11
リハビリテーション概論	.370*	.195	.24	.356*	.203	.245
病理学	.307*	.303*	.331*	.306*	.171	.241
整形外科科学	.281	.212	.127	.175	.273	.12
臨床医学総論	.016	-.076	.201	-.047	-.024	.246
内科学	-.005	-.05	.11	-.046	.073	.191
神経内科学	.326*	.303*	.174	.164	.177	.115
小児科学	.133	.089	-.012	.08	-.033	-.003
精神医学	.197	.05	.236	.169	.188	.283
リハビリテーション医学	.353*	.197	.444*	.303*	.151	.222
老年医学	.15	-.021	.179	.113	.052	.208
臨床心理学	.159	.053	.174	.136	.075	.0001
作業療法学概論	.254	.117	.244	.309*	.236	.288
基礎作業学	.311*	.185	.244	.249	.147	.223
日常生活適応学	.282	.08	.248	.328*	.121	.219
日常生活適応学演習	.12	.123	.300*	.134	.123	.156
身体障害評価学	.144	.112	.143	.2	.122	.107
身体障害評価学演習	.102	.131	.07	.156	.11	.069
身体障害治療学	-.04	.002	.057	.072	.088	-.083
身体障害治療学演習	.073	.114	.04	.194	.131	.134
精神障害評価学	.054	-.002	.329*	.05	-.037	.234
精神障害評価学演習	.066	.019	.327*	.081	-.021	.198
精神障害治療学	.094	.092	.252	.21	.02	.139
精神障害治療学演習	.085	.046	.317*	.186	.015	.164
発達障害評価治療学	.19	.29	.311*	.198	.181	.188
発達障害評価治療学演習	.148	.286	.255	.156	.199	.191
老年期障害評価治療学	.067	.167	.167	.108	.119	.113
老年期障害評価治療学演習	.074	.161	.256	.103	.083	.157
地域作業療法学	.16	.243	.308*	.251	.282	.276
臨床実習特論Ⅰ	.292	.253	.216	.292	.138	.161
臨床実習特論Ⅱ	.295	.22	.187	.302*	.21	.245
臨床実習特論Ⅲ	.107	.087	.111	.284	.126	.152
レベル1 臨床実習	.228	.25	.086	.164	.019	.119
レベル2 臨床実習	.247	.199	.174	.312*	.057	.127
レベル3 臨床実習	.073	.167	-.001	.096	.091	.109
心理学	.102	.082	.188	.171	.11	.199
統計学	.044	-.087	.19	.09	.071	.158
基礎ゼミ	.328*	.177	.406*	.302*	.196	.265
表現演習	.299	.171	.420*	.271	.202	.234
コミュニケーション演習	.316*	.171	.348*	.297	.149	.279
情報活用演習	.121	.021	.196	.153	.116	.185
スポーツ・健康	.228	.167	.326*	.278	.105	.208
英語	.07	.08	.158	.093	.152	.166

*p<.05

表5 LCR, OCRの各領域と各科目のCR役立ち度との相関(選択科目)

選択科目	LCR関心性	LCR自律性	LCR計画性	OCR関心性	OCR自律性	OCR計画性
医療と福祉	.352*	.224	.429*	.304*	.197	.246
高齢者・障害者の心理	.276	.397*	.217	.223	.165	.142
高齢者・障害者福祉論	.320*	.416*	.399*	.287	.285	.152
薬理学	.17	.363*	.25	.397*	.289	.207
微生物学	.05	.428*	.076	.238	.437*	.322*
栄養学	.09	.347*	.139	.128	.382*	.245
スポーツ障害学	-.214	-.149	.321*	.016	.293	.397*
救急医学	.04	.125	.26	.129	.345*	.305*
衛生・公衆衛生学	.154	.610*	.447*	.595*	.645*	.680*
職場倫理・職場管理学	-.13	.301*	.390*	.13	.431*	.660*
安全管理論	-.273	-.043	-.094	.384*	.047	.002
関係法規	.455*	.505*	.281	.188	.605*	.407*
言語聴覚障害治療学	.109	.079	.168	.225	.118	.192
介護福祉論	.356*	.338*	.380*	.336*	.322*	.347*
作業療法演習Ⅰ	.297	.262	.261	.249	.205	.136
作業療法演習Ⅱ	.302*	.268	.297	.327*	.138	.145
作業療法演習Ⅲ	.354*	.344*	.314*	.309*	.187	.23
高次神経障害作業療法学	-.067	.075	.097	-.05	.143	.006
地域作業療法学演習	.208	.177	.241	.336*	.319*	.306*
福祉機器論	.126	.159	.117	.093	.195	.026
義肢装具学	.107	.087	.111	.284	.126	.152
義肢装具学演習	.187	.089	.119	.156	.128	.212
作業療法特講	.484*	.462*	.374*	.402*	.528*	.410*
職業関連活動	.066	.09	.297	.096	.147	.26
リスク管理学	.420*	.456*	.244	.527*	.487*	.312*
障害者スポーツ論	.267	.218	.156	.462*	.289	.278
作業分析学	.266	.377*	.071	.468*	.437*	.380*
チーム医療演習	.298	.171	.348*	.297	.149	.279
基礎作業学演習Ⅰ	.332*	.386*	.225	.17	.12	.015
基礎作業学演習Ⅱ	.323*	.387*	.232	.312*	.243	.017
基礎作業学演習Ⅲ	.242	.176	.324*	.278	.105	.208
理学療法概論	.026	-.079	.283	.157	-.129	.203
看護学	.121	.021	.196	.153	.116	.185

*p<.05

表6 学生がキャリア成熟のために学びたいこと

カテゴリー	サブカテゴリー	回答例
リアルな臨床	臨床現場	実際の臨床現場で行っていること／実際の臨床現場について詳しく知りたい(身障だけでなく、精神、発達など様々な部門において)／実践的な作業療法
	臨床で活用できる知識と技術	臨床に近い考え方、知識について／臨床で活かせる実技／臨床での治療学を教えて欲しい／臨床で使う触診等を学びたい／実際に現場で治療に用いられていること
	臨床で出会う症例	実際の現場に近い症例を基にした課題を多く取り扱った授業を受けたい／疾患が同じでも症状が人により違うため、実際に対応している方法を学びたい
作業療法の支援技術	作業療法の手技	作業療法による徒手のリハビリテーションの技術について／治療の際の手技、それに必要な基礎知識／徒手の支援方法を学ぶ時間が欲しい
	機器を用いた作業療法支援	電気刺激やBMI, ITなど最新の支援技術について／評価機器や治療機器について／物理療法や低周波治療などを学びたい／将来的に使用されるロボット支援について知りたい
	時期別作業療法	終末期について学習したい／がん患者に対するリハについて／回復段階による作業療法の評価・治療について
	作業療法支援のプランニング	プログラムの立案について／患者の心理・精神面の介入プランについて／身体障害の評価からプログラムを立案する方法、考え方
コミュニケーション技法	コミュニケーションの基本	人との距離や話し方／実際に患者とふれあう機会や、学生同士で設定して実習／いきなりの臨床だとコミュニケーションがとれないのでコミュニケーションが上手くなるよう練習したい
	疾患別コミュニケーション	対象者の方への声掛けの方法や、コミュニケーションの取り方／精神状態の不安定な方を相手にした時の受け答え／精神領域の障害を持っている方との接し方
就職関連	就職先	SST、認知行動療法を学べるところ、精神分野の就職先／働く領域の中でもどのような所に就職ができるか／どこの地域は就職しやすいのか、またしにくいのか
	国の方針	経営方法や国のこれからの方針／今後の作業療法士の働き方／医療保険や介護保険、診療報酬について
	就職後のキャリア	管理職をめざせる職場について／就職後にどのような勉強会に出たらよいか／就職したら転職はできるのか

体化している段階であり、長期間の臨床実習により、希望する職業分野や自分なりの職業人としての目標について真剣に考え始めている段階と考えられる。このことから「希望する職業に就くための具体的な計画を立てている」や「どのような職業人になりたいか、自分なりの目標をもっている」などの項目が含まれるOCRの計画性に関しても2年次生、3年次生と比べて高い得点傾向を示したと考えられる。しかし、一方で楠奥ら¹²⁾は、インターンシップの参加が職業成熟を高めるかについて検証し、有意な影響は認められないと報告している。作業療法学生においても、臨床実習を2年次生と3年次生で期間の差はあるが実施しているにも関わらず、2年次生から3年次生にかけてはOCR得点に有意な変化はみられておらず、臨床実習がキャリア成熟に対して必ずしも効果的とは言えない可能性もある。また、森山ら¹³⁾は、計画性は具体的な行動内容が多いため、就職活動が本格化する3年次生の前期頃まで低いのは納得のいくところであると報告しており、本研究も同様に、就職活動が本格化し始めることが影響し、4年次生のOCRの計画性が有意に高い結果になったと考えられる。

以上より、LCRの領域では有意な変化を認めず、OCRの領域において、自律性と計画性は学年が上がるにつれて有意に変化があるが、関心性は変化が少ないことが明らかになった。田仲ら¹⁴⁾は、養成校のように資格取得に向けたカリキュラムに沿って単位を取得することで客観的にはキャリア形成が進行しているにも関わらず、学生自身の実感には必ずしも結びついていないと報告している。本研究の結果も、学年が上がりカリキュラムが進行するにつれてもLCR、OCRのすべての領域が高い値を示しているとは言い切れず、特に2年生から3年生にかけてのカリキュラムが学生自身のキャリア成熟の実感には結びついていない結果となっていた。しかし、若林ら¹⁵⁾は、専門性の高い学部に所属する学生は入学以前から将来の希望職種を明確にしている傾向が強いことや、専門性の高い学部では、大学での学業経験が直接職業に結びつくことから、職業レディネスが高いと報告しており、本研究の結果も専門性の高い作業療法学生であるため、入学時より職業キャリア成熟度がある程度高いことにより、LCR、OCRの学年による変化が乏しかった可能性が考えられる。

2. 作業療法学生が捉えるカリキュラムのキャリア成熟役立ち度

本学の保健医療学部作業療法学科のカリキュラムに対するCR役立ち度は、多くの科目がキャリア成熟に対して役立っていると学生は捉えていることが明らかになった。これにより、4年次生までに実施される現行のカリキュラムの多くがキャリア獲得のために役立っていると感じていることが示唆された。作業療法士のように専門性の高い職業を目指す学生は、入学以前から職業に対する関心が高いと考えられ、本研究のOCR関心性の結果も、学年で有意な差がみられなかったことから、関心がある職業に必要な科目を学んでいると捉えていることにより、カリキュラムがキャリア成熟に役立っていると感じている可能性が考えられる。一方で、LCR、OCRとの相関関係をみると、微生物学(25)、衛生・公衆衛生学(5)、職場倫理、職場管理学(4)、作業療法特講(20)、リスク管理学(24)、作業分析学(13)など、選択科目の履修者が比較的に少ない科目はOCR、LCRの限られた領域に相関を認めたが、総じてLCR、OCR全ての領域と相関関係のある科目はなかったことから、これらの科目は学生にキャリア成熟に必要な科目と考えられていない可能性があると考えられる。

3. 学生がキャリア成熟のために学びたい内容と作業療法学生に対するキャリア教育

キャリア成熟のために学びたいことについてのアンケート結果から学生は、[作業療法の支援技術]や[コミュニケーション技法]など臨床で必要な作業療法の専門技術について詳細に学びたいと希望していた。また、[リアルな臨床]や[就職関連]というカテゴリーにもあるように、教科書では学ぶことが難しいリアルな情報を養成校在学中より積極的に得たいと希望していることが明らかとなり、現行のカリキュラムではキャリア成熟のためのリアルな情報が不足している可能性が示唆された。現状では、対象者に作業療法を実施するための情報は得られているが、作業療法士としての職業人生を思い描くための情報が少ない可能性がある。

近年は、医療の進歩や人権擁護、社会保障制度の進展から作業療法学生が学ぶべきことは多様化、多角化しており、医療・保健制度の改定による入院期間が短縮される理由から、臨床現場では即戦力に近い形で就

職が求められしことが多い。一方で、作業療法士が含まれる医療、福祉職は離職者が非常に多い職種となっている。就職後、作業療法士になるために学んだことと臨床現場で求められていることや職務の実態のギャップが早期の離職を促進していると考えられる。したがってキャリア教育の必要性は非常に高いと考えられ、養成校在学中より、作業療法学生に対し、社会的、職業的自立に向け、必要となる能力や態度を育てるために、キャリア教育と職業教育の両輪が必要と考えられる。そのためには、キャリア教育科目のカリキュラムへの導入を検討し、作業療法士教育の中に位置づける必要がある。エドガー・シャインは、生き方や社会的役割についての考えなど自分の内にあるものを「内的キャリア」と名付け¹⁶⁾、この「内的キャリア」と密接に関連する概念としてキャリア・アンカーを提唱している¹⁶⁾。キャリア・アンカーは、仕事をするうえで譲りたくない価値観や考え方とも示されている¹⁷⁾。近年、作業療法士は毎年4000人～5000人程度増加しており¹⁸⁾、回復期リハビリテーション病院など多数の職員が在籍する職場では、経験年数の浅いうちからリーダーの役割を担い、作業療法士としての成長を待たずに役割や周囲との関係、マネジメントなど学べべき内容が、自分自身に焦点を当てた内容から周囲や組織へと変化する。その中で、現代の医療、福祉業界では当たり前になっている他職種連携や、変化を遂げる過程にある地域包括ケアを理解し、その一端を担うことも求められている。様々な人とのコミュニケーションや環境の変化に対応し、その中でキャリアを成熟させていくために、作業療法学生にはキャリア・アンカーを育む教育を行うことが重要と考えられる。キャリア・アンカーを確立するために、養成校在学中より、職業に就くということ、働くことの意味、人生における職業の位置づけなどの、職業および作業療法士のキャリアに関する講義や自分自身の傾向や方向性を考え、言語化する演習を行うことが必要と考えられる。また、先輩作業療法士の職業人としての毎日やビジョン、キャリア・アンカーなどに触れる機会を設け、作業療法を実施するための情報ばかりではなく、どのようにして仕事や人生を歩んでいきたいかについて課題を提示することや議論することを通じて、職業人生を送るうえでの価値観や考え方の構築を支援していくことが重要と考えられる。

4. 本研究の限界と今後の課題

本研究は作業療法士の一養成校における横断的な研究であり、キャリア成熟の変化については養成校や教員による指導方法の違いから影響を受けることが考えられ、個別性も存在することから、同じ作業療法学生においても、異なる傾向が示される可能性がある。また、LCR、OCRとカリキュラムの関係性については、相関関係の強い科目がみられなかったことや、選択科目は履修者数にバラつきがあるため、現行のカリキュラムがキャリア成熟に関して効果的に影響を与えていない可能性が浮き彫りになった。今後は、入学時からのキャリア成熟の変化とカリキュラムの効果を縦断的に捉えられるような研究デザインを構築し、キャリア成熟に効果的に影響を与える科目や授業方法について検討していきたい。

【文献】

- 1) 中央教育審議会：初等中等教育と高等教育との接続の改善について、高大連携に関する国の検討状況及び方針等、平成11年12月16日答申抄、(1999)
- 2) 中央教育審議会：今後の学校におけるキャリア教育/職業教育の在り方(答申)、(2011)
- 3) 文部科学省：キャリア教育とは何か(オンライン)、入手先(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2011/06/16/1306818_04.pdf) (参照2018. 1. 25)
- 4) 坂柳恒夫：進路成熟の測定と研究課題、愛知教育大学教科教育センター研究報告第15号、269-280(1991)
- 5) 工藤榮一、煙山奨也、菊池恵美子：医療系大学一年次生の授業改善への一方策、日本保健科学学会誌 18(3)、139-148(2015)
- 6) 石原留美、松村恵子：看護大学生の入学時におけるアンドロジニアな生き方の構造、香川母性衛生学会誌、14(1)、20-26(2014)
- 7) 朝倉智之、今井忠則、外里富佐江、浅川康吉、山路雄彦、他：群馬大学医学部理学療法・作業療法学専攻在学生のキャリア教育に関する現状とニーズ調査、群馬保健学紀要 35、29-42(2015)
- 8) 朝倉智之、浅川康吉、高橋麻衣子、李範爽、中澤理恵、他：理学療法学専攻、作業療法学専攻学生に対する卒業生による研修会がキャリア意識に与える影響、理学療法群馬 27、10-15(2016)
- 9) 厚生労働省：新規大学卒業就職者の産業別離職状況(オンライン)、入手先(<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11650000-Shokugyouanteikyokuhakenyukiroudoutaisakubu/0000140613.pdf>) (参照2018. 5. 25)
- 10) 坂柳恒夫：大学生のキャリア成熟に関する研究、愛知教育大学教科教育センター研究報告第20号、9-18(1996)

- 11) ウェブ・フリック (著), 小田博志 (翻訳): 質的研究入門―“人間の科学”のための方法論.393-400, 春秋社 (2011)
 - 12) 楠奥繁則: 自己効力論からみた大学生のインターンシップの効果に関する実証研究, 立命館経営学 44 (5), 169-185 (2006)
 - 13) 森山廣美: 大学におけるキャリア教育, 四天王寺国際仏教大学紀要 44, 309-319 (2007)
 - 14) 田中由佳, 河西正博, 吉森恵, 梅谷進康, 中山忠彦, 他: 福祉系大学生のキャリア意識に関する調査研究 (第2報), 神戸医療福祉大学紀要, 137-144 (2013)
 - 15) 若林満, 後藤宗理, 鹿内啓子: 職業レディネスと職業選択の構造: 保育系, 看護系, 人文系女子短大生における自己概念と職業意識との関連, 名古屋大学教育学部紀 教育心理学科 30,63-98 (1983)
 - 16) Schein EH (著), 金井 壽宏 (翻訳): キャリア・アンカー―自分のほんとうの価値を発見しよう―,21-55,白桃書房 (2003)
 - 17) 大町かおり, 高木綾一: リハビリテーション職種のキャリア・デザイン, 62-75, シービーアール (2017)
 - 18) 日本作業療法士協会: 作業療法白書2015. 日本作業療法士協会, 東京, p 86, (2017)
- (2018年10月11日受付、2018年11月22日受理)

Study on relationship between career maturity degree and curriculum of occupational therapy students

Shuhei TATEOKA¹⁾, Tamami Aida¹⁾

【Abstract】

Objective: This study aims to investigate whether the Occupational Therapy Department curriculum is useful for career maturation and evaluate career education at Mejiro University.

Method: There are 181 subjects registered from grades 2–4 in the Occupational Therapy Department. Each subject completed a questionnaire regarding the efficacy of the curriculum (usefulness to CR) and the career/readiness scale (Life Career Readiness :LCR, Occupational Career Readiness :OCR) (Sakayanagi, 1996)

Results: Response rate was 71.2%. OCR autonomy and planning were superior in the 4th grade when compared to the 2nd and 3rd grade, but comparisons from other areas were poor. The median CR usefulness value was ≥ 4.0 in most subjects, but no CR usefulness values correlated with all areas of LCR and OCR for any subject.

Conclusions: Because no subject correlated with all areas of LCR and OCR in terms of CR usefulness, it is possible that subjects of the current curriculum are considered unnecessary for career maturation.

Keywords: occupational therapist students, Career, curriculum

1) Department of Occupational Therapy, Faculty of Health Science, Mejiro University